

街の賑わい



11 祇園の賑わい



京都祇園町（現京都市東山区）にあった「御香煎所了郭」前の賑わいを描いている。店先には子犬が戯れている。香煎とは茶道で、のどを潤して香りを楽しむ「香煎湯」の原料である。米・麦を煎ったものにシソ・ミカンの皮などの粉末を加えたが、各店には秘伝のブレンドがあった。祇園町には香煎を売る店が数店あったが、了郭は老舗で、貞享2年

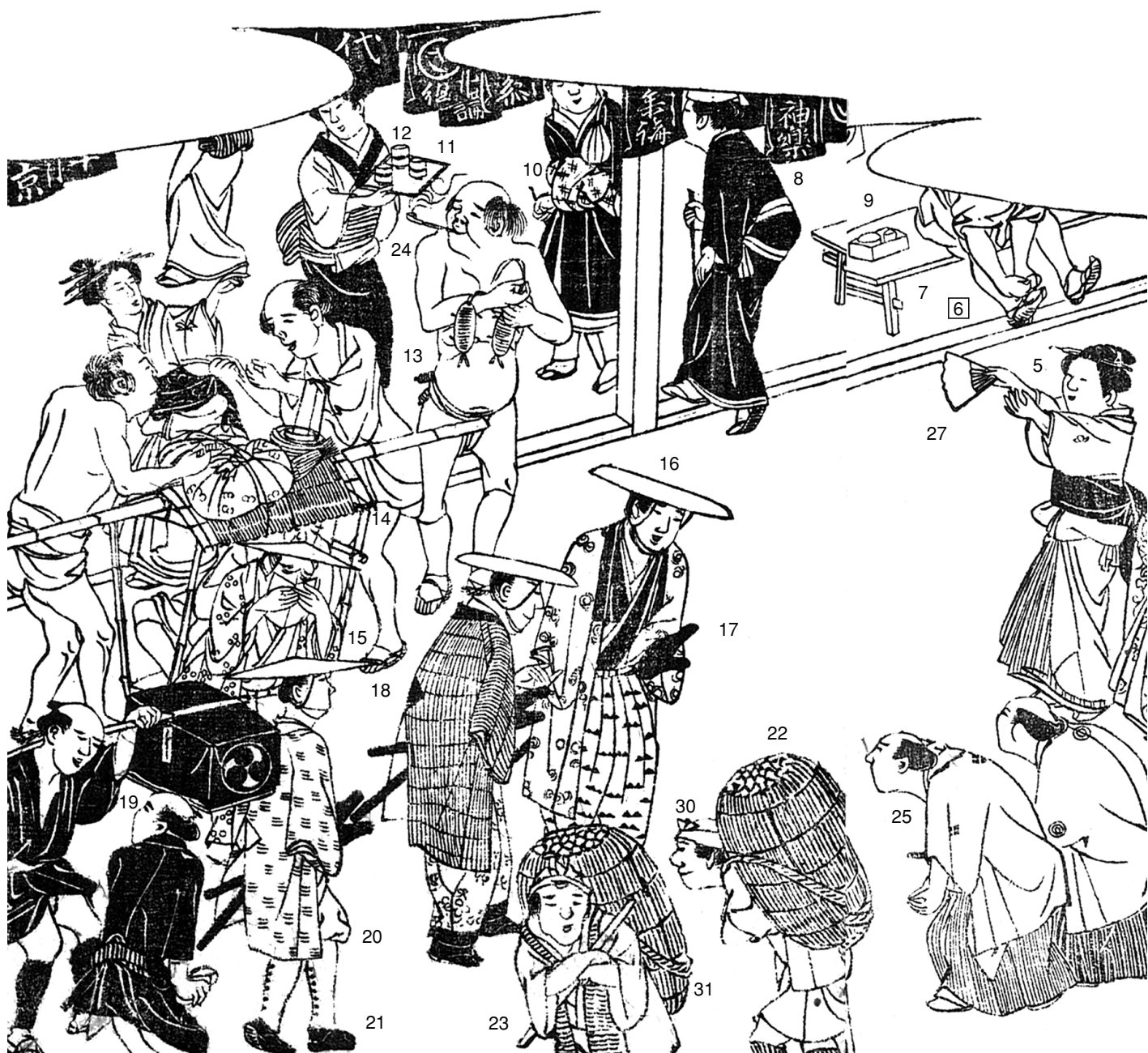
（1685）の京案内『京羽二重』にも記載されている。店内では女性の店員が、綿帽子を被った女性客に、製品を勧めている。また、石臼や薬研、各種材料を入れたタンスが見える。道を往く人々は、中央に見える着飾って供を連れた芸妓をはじめとして、遊び人風の二人連れ、虚無僧などが見える。天秤棒を担いだ男性も、芸妓の華やかさに思わず眼を遣ってい

- 1 見世庭（守貞）
- 2 見世（守貞）
- 3 上げ見世（守貞）
- 4 手拭いを被る
- 5 天秤棒を担ぐ
- 6 天蓋
- 7 石臼
- 8 薬研
- 9 島田髷（我衣）
- 10 裾を持ち上げる
- 11 柱看板（守貞）「御香煎所了郭」
- 12 京格子（守貞）
- 13 眉を剃った女性
- 14 草履
- 15 焙烙頭巾（守貞）
- 16 頭陀袋
- 17 花籠
- 18 綿帽子（守貞）
- 19 頭巾
- 20 杖
- 21 扇子
- 22 懐手にする
- 23 風呂敷を肩に担ぐ
- 24 風呂敷を片手で持つ
- 25 風呂敷を両手で持つ
- 26 風呂敷で担う
- 27 手拭いを首に巻く
- 28 編笠（守貞）



る。なお、本文では「祇園の地の繁栄は、祇園の神による恩恵の賜物であり、京の清廉な水で人々が体を洗って、美顔を誇り、美服で着飾って月花にうかれるのも名物である」と、当地の華やかさを誉め称えている。（富澤）

12 東三条の送迎風景



旅人で賑わう三条通り（現京都市）の茶店前の活気を描く。茶店で新しい草鞋を手にした駕籠人足は、煙管をふかし、一休みしている。茶店前の宿駕籠に乗った旅人は酔ってしまったのか、鼻紙を口に当てている。茶店の前をたいこもちを連れた芸妓たちが行く。たいこもちの一人は手ぬぐいで扇子を被り、キツネの真似をし「狐拳」としゃれこみ、場を盛り上げている。狐拳は「猿師（鉄砲）・庄屋・キツネ」

の三つで勝ち負けを競う、ジャンケンと似た遊びで、酒席で行われた。挟箱を担う従者を連れた陣笠を被った3人の武士は、旅に出るところを2人の紋付の羽織を着た商人に挨拶されている。商人の後ろでうやうやしく風呂敷包みをもった人物がいる。風呂敷の中には何か餞別の品があるのだろうか。（富澤）

- [1] 手拭いを被る
- [2] 拳を打つ
- 3 たいこもち
- 4 芸妓
- 5 眉を刺った女性
- [6] 草鞋を履く
- 7 縁台
- 8 まねき
- 9 煙草盆
- 10 前帯
- 11 盆
- 12 湯呑み
- 13 銭さし
- 14 宿駕籠 (守貞)
- 15 鼻紙
- 16 陣笠
- 17 柄袋
- 18 羽織
- 19 挟箱
- 20 江戸脚絆 (守貞)
- 21 沓
- 22 俵
- 23 息杖
- 24 煙管
- 25 脇差し
- 26 風呂敷包み
- 27 扇子
- 28 草履
- 29 ぱっち (守貞)
- 30 向う鉢巻
- 31 背負縄



13 大津の遊郭

- 1 六尺棒
- 2 しごき帯
- 3 草履
- 4 眉を剃った女性
- 5 引舟（守貞）
- 6 太夫（守貞）
- 7 打掛
- 8 禿（守貞）
- 9 長柄傘（守貞）
- 10 下男（守貞）
- 11 櫛
- 12 筭
- 13 前結びの帯
- 14 右手で褌をとる
- 15 高下駄
- 16 中剃り（守貞）
- 17 片肌脱ぎ
- 18 担い棒
- 19 尻からげ（嬉遊）
- 20 綿帽子
- 21 手を打つ子供
- 22 ぱっち（守貞）



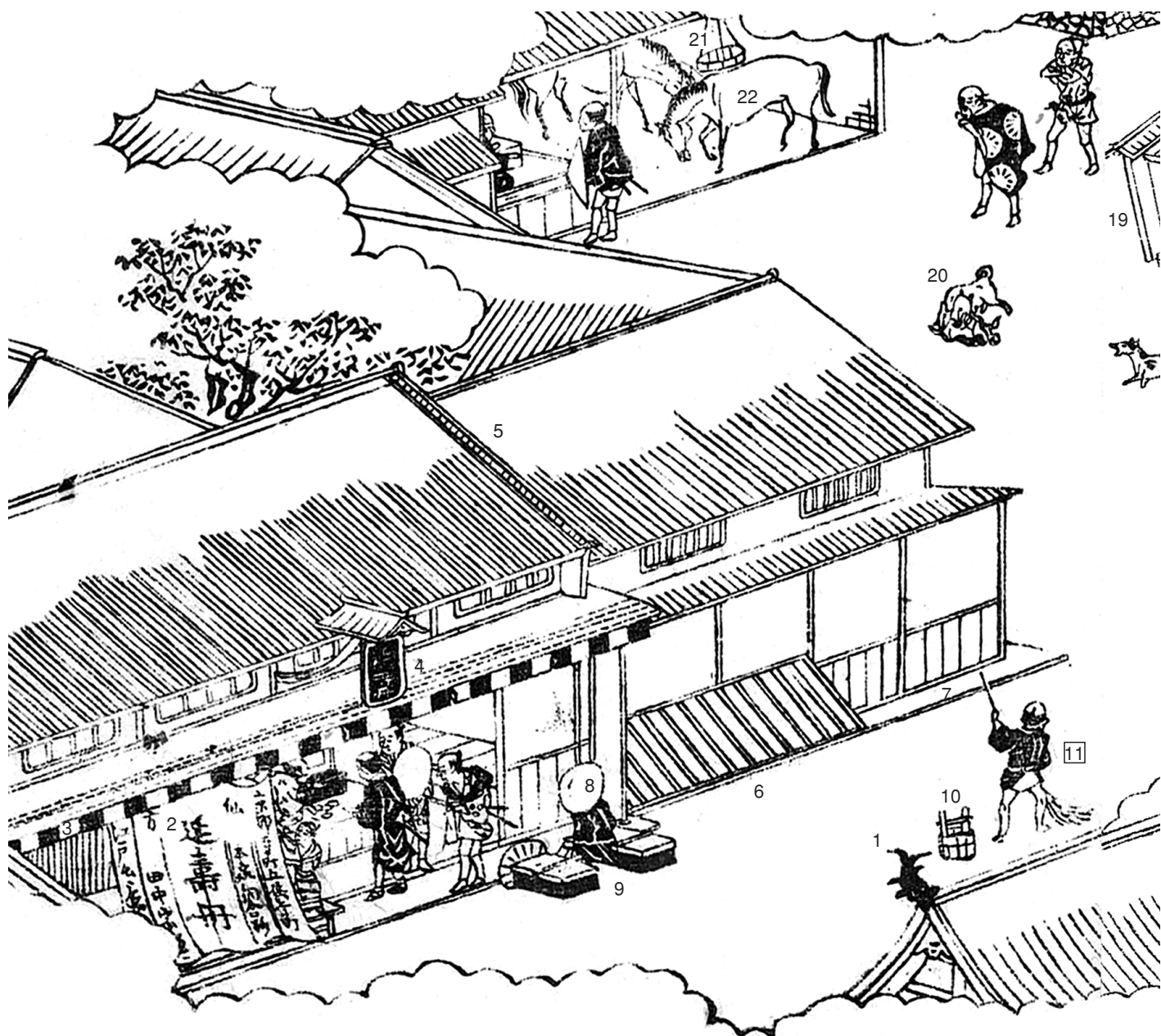


大津（現滋賀県大津市）の柴屋町を遊女一行が行列している様相を描く。柴屋町は大津の遊郭の所在地であった。遊女が揚屋に向かう道行きであろうか、行列を組んで歩いている。六尺棒を持った幫間が先導し、その後に大勢の遊女・芸子が続く。先頭は最も地位の高い太夫であろう。長柄傘がかざされている。太夫が外出するときには必ず下男が長柄傘を差しかざすのが基本であった。また、横には少女が付き従っているが、禿であろう。右側には眉を剃った

女性が付いているが、これは太夫の供をする引舟であろう。

この一行を道の傍らで見物している親子がいる。子供は一行を見て手を打ってはしゃいでいるようである。また梅の木を植えるために運んできた男たちも、植木を地面におろし、一人はその枝の様子に注意を向けているが、他の一人は完全に女性たちの行列に関心を向けている。（福田）

14 岡崎宿の朝



東海道第38番目の宿場である岡崎宿（現愛知県岡崎市）を描く。家康生誕の地としても知られる岡崎は本多家五万石の城下町で、矢矧川水運の要所でもあったことから、商業も盛んであった。一般に「岡崎の二十七曲り」の呼び名で知られるとおり、鉤の手に曲がった道が特徴で、画面にもそれが描かれている。城下町は、龍ヶ城の旧名をもつ岡崎城を中心に、東西の往還に沿って矢矧川の手前まで60町（約6.5km）あまりにわたって続いていて、中でも商家が集まった連尺町、旅籠や問屋などが集まった伝馬町、職人の多い材木町などは家数も多く、城

下の賑わいの中心地でもあった。この絵では、鉤の手に曲がった往還に面して、左手奥には人馬の継立を行う問屋らしき建物、その手前左には「延寿丹」ののれんを下げた薬種店、右手には旅籠屋、そして手前の雲の合間には岡崎城と思われる鯢を戴いた屋根が描かれ、城下町としての賑わいをあわせもつ岡崎宿の特徴を、象徴的に描いている。

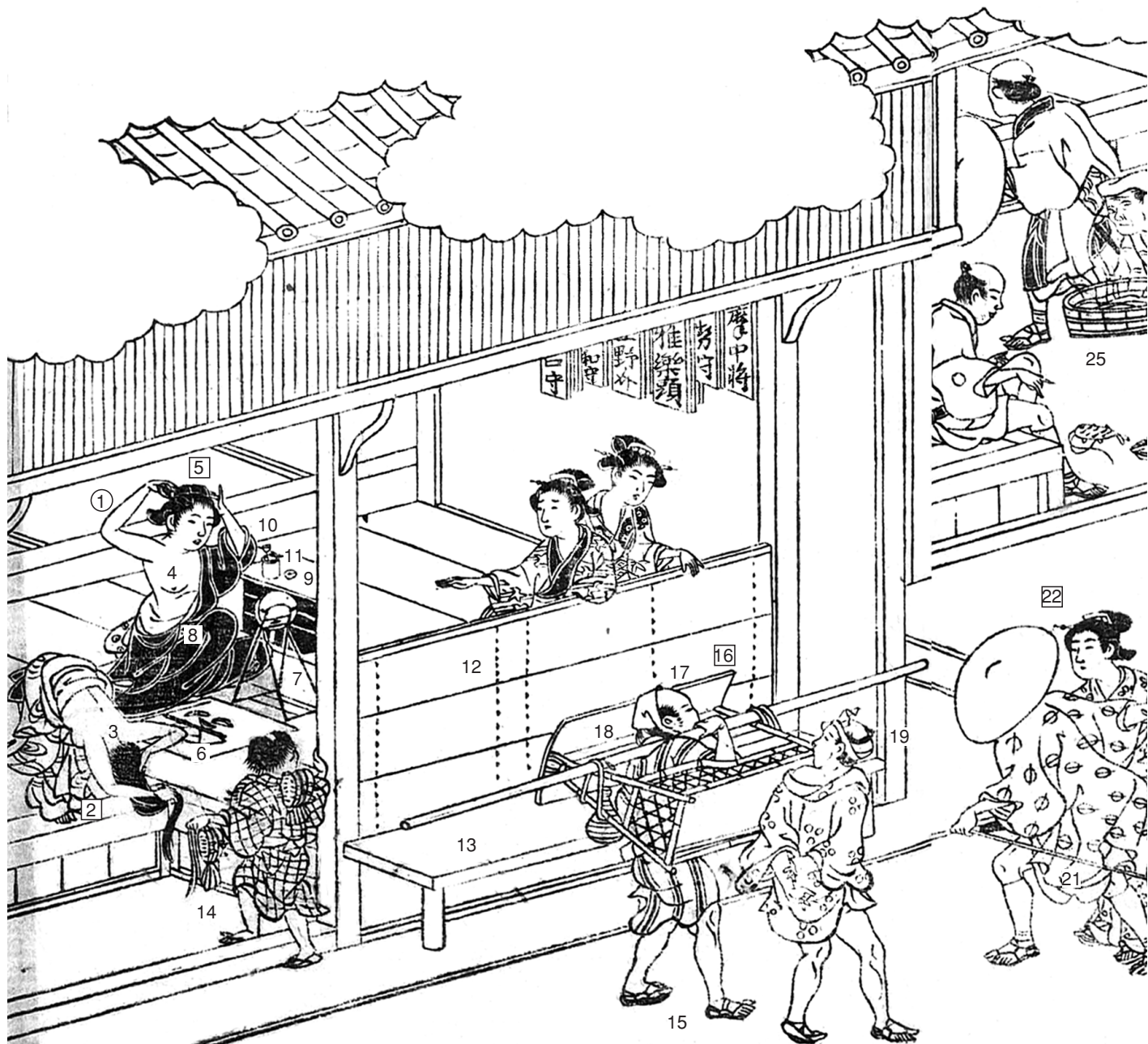
岡崎宿はまた、「岡崎女郎」と小唄でもうたわれる飯盛女でも知られ、曲亭馬琴の『鞆旅漫録』にも「よし田をかざき一駅の妓百余人あり」と記されている。ここに描かれている旅籠では、旅人がまさに



- 1 鯢
- 2 長暖簾「仙方延寿丹」
- 3 暖簾
- 4 屋根看板（守貞）
- 5 降り棟
- 6 犬矢来
- 7 犬走り
- 8 笠
- 9 挟箱
- 10 手桶
- 11 ほうきで掃除する
- 12 杖
- 13 上げ見世（守貞）
- 14 藪
- 15 見世（守貞）
- 16 潜戸
- 17 おじぎをする
- 18 前垂れ（守貞）
- 19 うだつ
- 20 犬
- 21 飼葉桶
- 22 馬

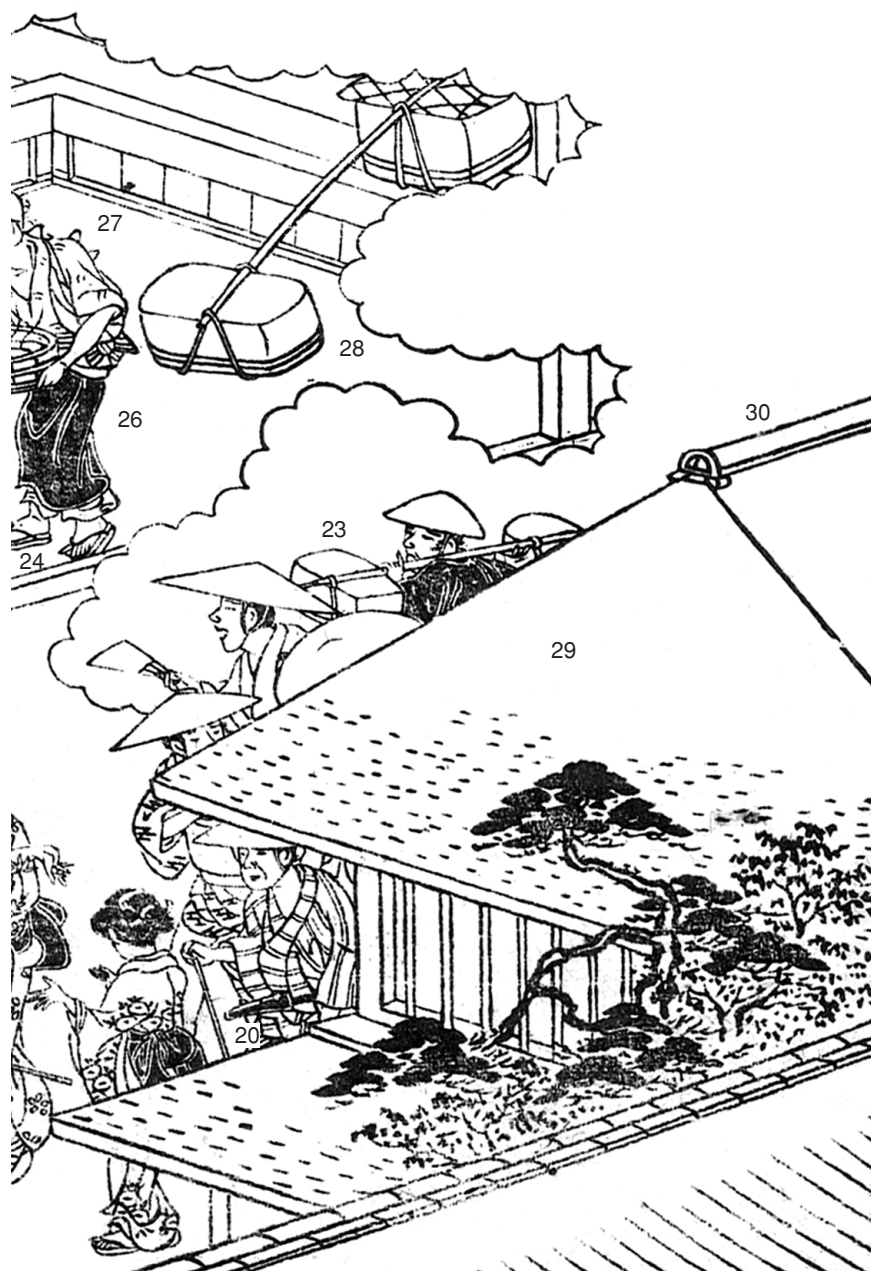
出立しようとしているところで、飯盛女たちが建物から身をのぞかせ、潜戸の外では仲居が見送るようすがみてとれる。また、旅籠の左奥の往還に行く二人連れは、風体からみて芸人であろうか。『新編岡崎市史3 近世』（新編岡崎市史編さん委員会、1992）によると、岡崎宿の北には山村と称する、万歳や猿曳きなどを生業とする芸能者の集住地があり、ここもまた町支配に属していたという。こうした人々もまた、繁華な城下町を渡世の場としていたのであろう。（山本）

15 三島宿の夕暮れ



夕暮れ時の活気ある三島宿（現静岡県三島市）である。箱根の山裾に位置する三島宿には多くの旅人が足を止め繁盛したが、この三島宿を特徴づけたのが後に「三島女郎衆はノーヘ」とも唄われた飯盛女の存在で、宿場の旅籠には飯盛女をおく飯盛旅籠とおかない平旅籠があったという。この飯盛女が両肌を脱いで髪を梳き、片肌脱いで鏡の前で髪を整えるなど客を迎えるために身づくろいする姿が描かれて

おり、身づくろいを終えて藪から顔を覗かせ客を引く姿や、店の前の路上で客の袖を引く姿も見える。泊り客に草鞋を売ろうとして入り口に立つ少年、隣の宿では到着した客の足を洗うための桶を運ぶ女中、客を送り空駕籠を担いで帰路につく駕籠人足など、客を迎えて慌ただしい宿場の夕暮れ時の情景が描かれている。（中村）



- ① 飯盛女
- ② 髪を梳く
- 3 両肌脱ぎ
- 4 片肌脱ぎ
- ⑤ 髪を櫛けずる
- 6 櫛
- 7 柄鏡
- 8 片膝立て
- 9 小箆筥 (守貞)
- 10 髪付け油
- 11 紅皿
- 12 蓐
- 13 ぱったり床几
- 14 草鞋売りの少年
- 15 草鞋
- ⑩ 宿駕籠 (守貞) を担ぐ
- 17 駕籠人足 (膝栗毛)
- 18 頬被り (膝栗毛)
- 19 鉢巻 (膝栗毛)
- 20 柄袋
- 21 杖
- ⑫ 客を引く
- 23 両掛け (用心)
- 24 下駄
- 25 足洗い桶
- 26 前垂れ (守貞)
- 27 襷 (守貞)
- 28 行李
- 29 寄棟
- 30 大棟

16 江戸の本屋

- 1 焙烙頭巾（守貞）
- 2 袈裟
- 3 煙草盆
- 4 火鉢
- 5 暖簾「いつミヤ・泉屋／ますや・枳屋」
まごひさし
- 6 孫庇
- 7 前髪
- 8 丁稚
- 9 箱看板（守貞）「錦絵さうし問屋 泉屋市兵衛」
- 10 子犬
- 11 口を扇子で覆う
- 12 上げ見世（守貞）
- 13 深編笠（守貞）
- 14 風呂敷包みを背負う
- 15 おかもち
- 16 草鞋
- 17 手拭いを被る
- 18 ぶらぶら
- 19 羽織
- 20 綿帽子
- 21 挟箱
- 22 扇子
- 23 柄袋
- 24 柱看板（守貞）「絵さうし」
- 25 大坂帽子（都風俗化粧伝）
- 26 草双紙
- 27 武者絵
- 28 役者絵
- 29 名所絵
- 30 相撲絵
- 31 子供を負ぶう

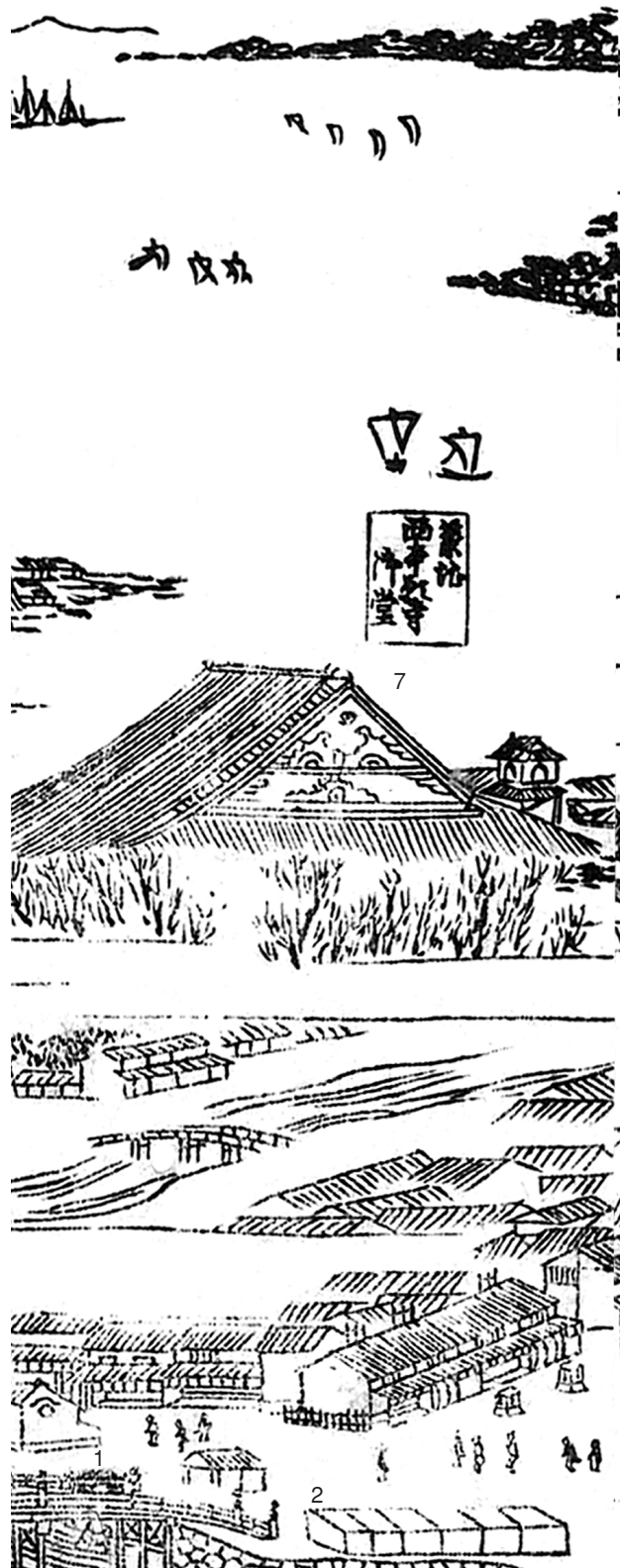


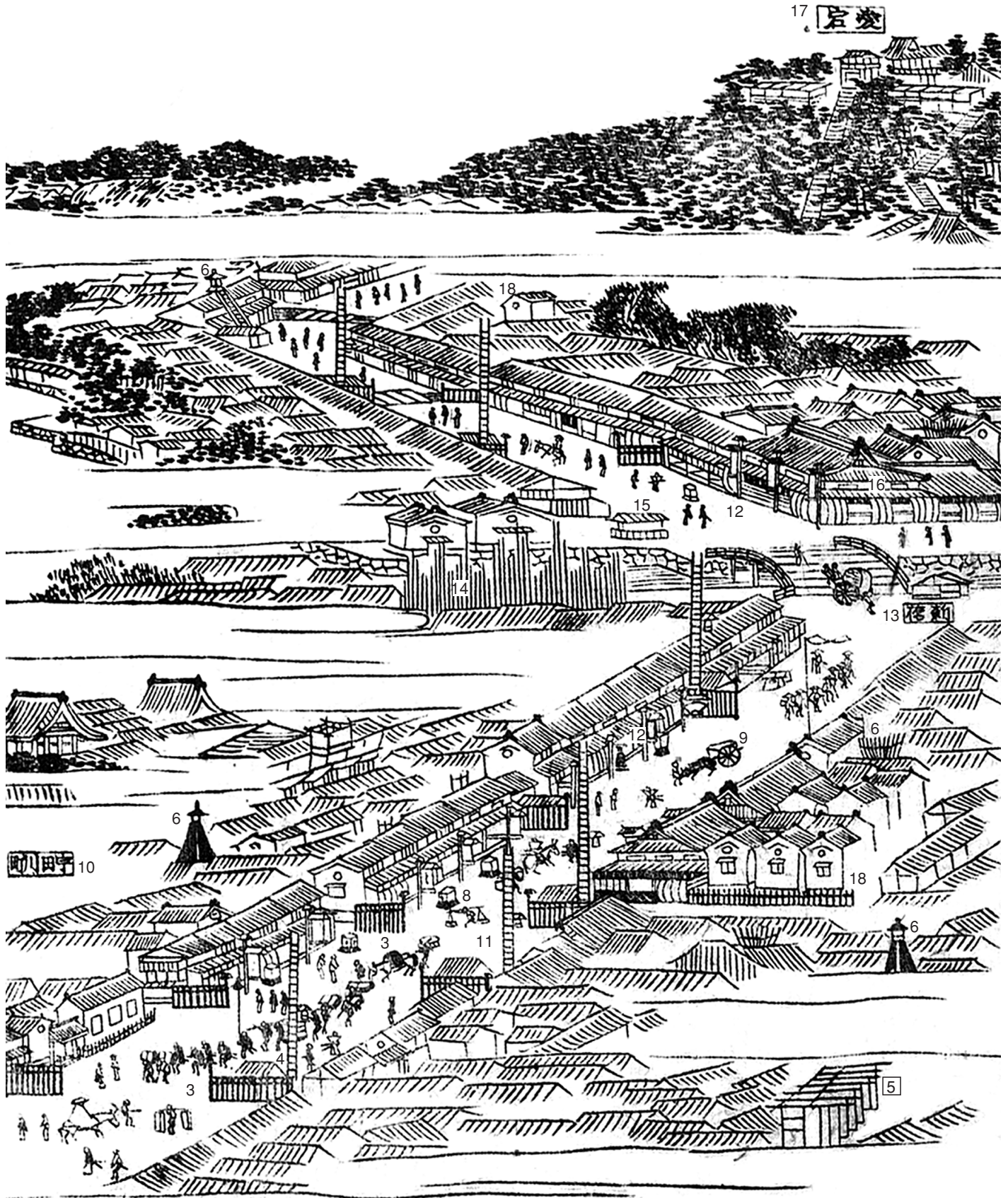
17 京橋から新橋へ

- 1 京橋
- 2 床見世
- 3 木戸（守貞）
- 4 番小屋（守貞）
- 5 布を乾す
- 6 火の見櫓（守貞）
- 7 築地本願寺「築地西本願寺御堂」
- 8 箱看板（守貞）
- 9 牛車
- 10 「宇田川町」
- 11 火の見梯子（守貞）
- 12 柱看板（守貞）
- 13 「新橋」
- 14 竹間屋
- 15 高札場
- 16 松坂屋
- 17 愛宕山「愛宕」
- 18 土蔵

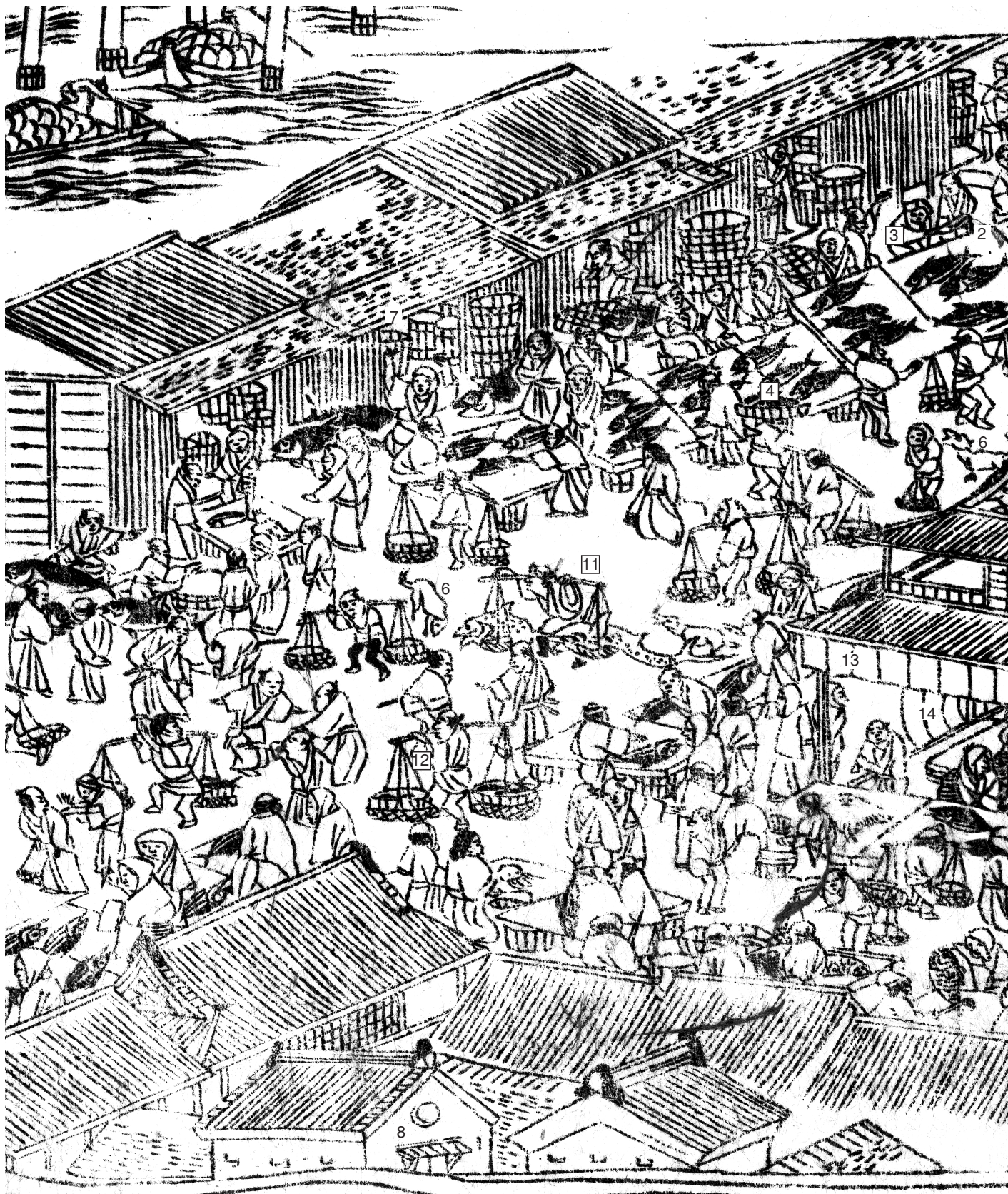
京橋から新橋（現東京都中央区から港区）方面を鳥瞰図で描く。街道の賑わいを示す記号である人々の姿は小さく描かれ、画面手前の近景では、髪型や刀の有無・運搬物・行為（行列）などは最低限の類型的な描き方により、かろうじて階級や性別がわかる。絵師は鋏形蕙斎（北尾政美）で、彼はのちに『江戸一目図屏風』において、この場所をより緻密に描いている。中央部付近には「新橋」があり、右側に呉服屋の「松坂屋」が、左側には竹間屋が見られる。江戸時代、火災の頻発した江戸では、竹は普請の足場作りなどに使われ、京橋の竹間屋は特に有名で、長い竹が空に向かって整然と並べられるさまは、錦絵にも描かれた。町の境に設置された木戸は、防犯のために置かれ番屋に住む木戸番が開閉を行った。木戸は夜の四つ時（午後10時ころ）に閉め、それ以降は左右のくぐり戸を通った。また、各町の火の見梯子は番屋に立てられ、自身番が管理した。

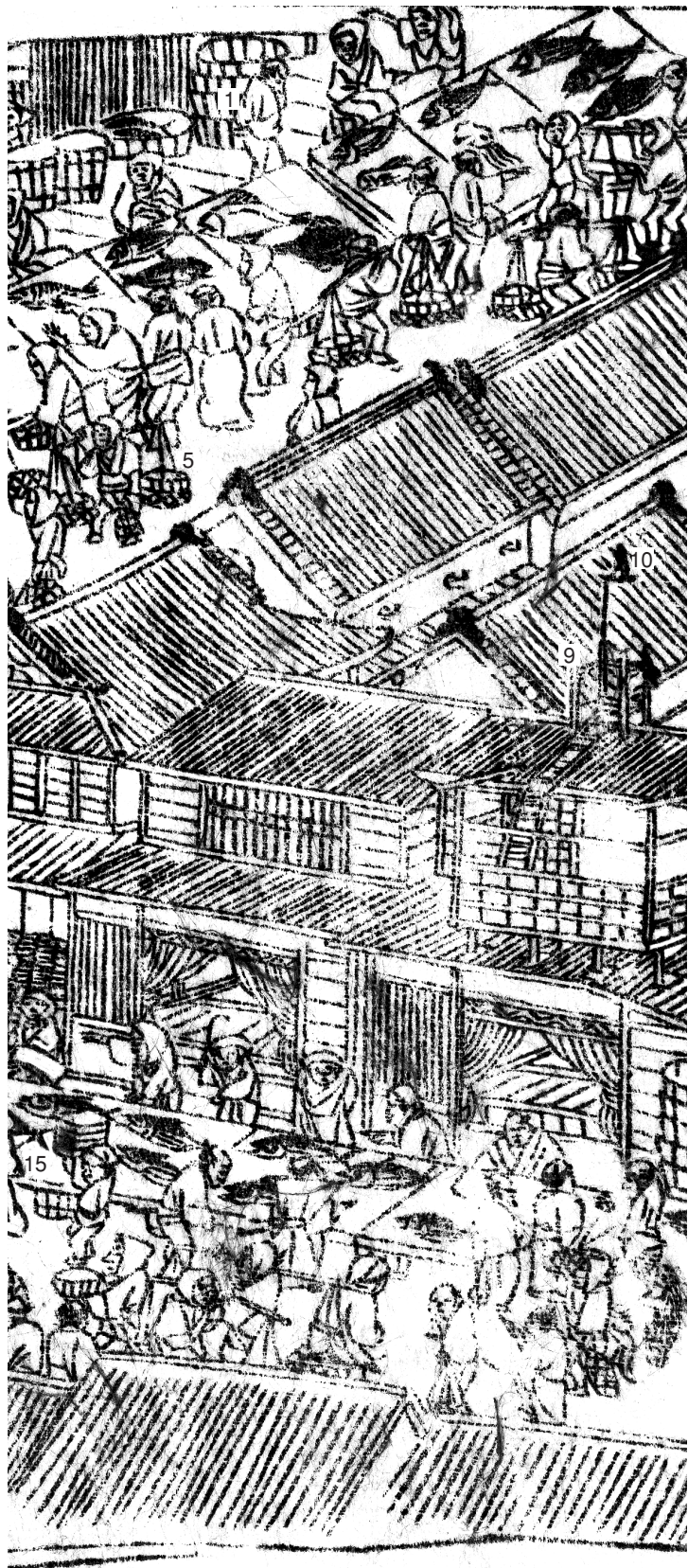
（富澤）





18 日本橋魚市場



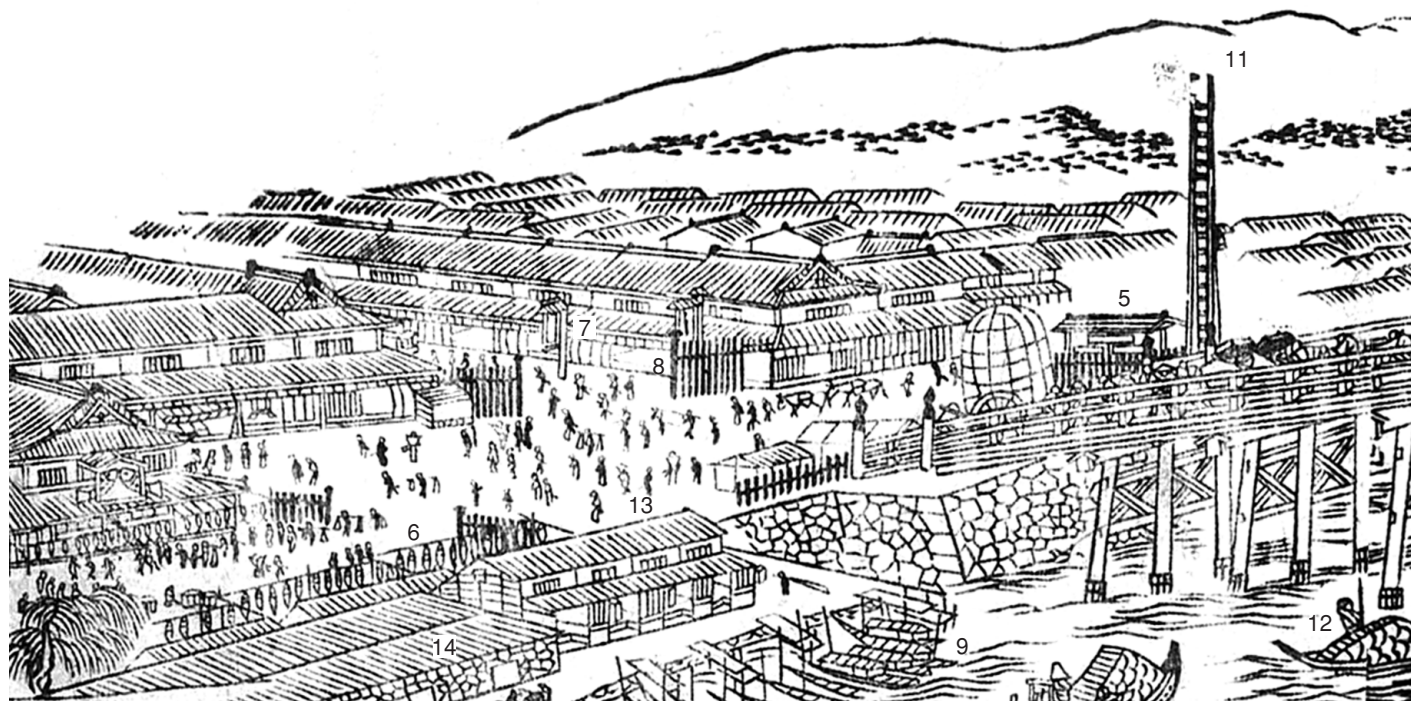


- 1 盤台
- 2 板船
- ③ 頬被りをする
- 4 頭上運搬
- 5 棒手振り
- 6 犬
- 7 とんとん葺き
- 8 土蔵
- 9 火の見
- 10 風見
- ⑪ サメを運ぶ
- ⑫ 天秤棒を担ぐ
- 13 暖簾
- 14 長暖簾 (守貞)
- 15 鰯売 (守貞)

日本橋魚市場の賑わいを描く。本図だけでも百人以上の人々が描かれ、その殆どが男性である。マグロ・カツオ・ヒラメ・サメ・タコなど、さまざまな種類の魚が商われている。小規模な商人である棒手振りは、仕入れた魚を入れた盤台と呼ばれる浅い桶を大型のザルに載せ、天秤棒で巧みに運んでいる。これから江戸の町に売りに行くのであろうか。盤台（桶）は運搬用のみならず、魚を並べて売る板船の土台にも使われている。頬被りをした男たちが多く、一見して女性とわかる人物は描かれておらず、魚市場が男性中心の商いの場であったことがわかる。犬がうろつく姿も見られ、市場のおこぼれに与っていたのだろう。

二本差しの刀や髷から武士と判別できる者も描かれている。武家屋敷では、儀礼の際に高級魚を多数消費したことが知られ、魚市場に出向き交渉にあたった侍がいたことがわかる。（富澤）

19 お江戸日本橋



東海道を京から下った旅の終着地である日本橋を描く。日本橋と日本橋魚市場の対岸、四日市魚市場（現東京都中央区）を遠景と超遠景を合わせた構図で描いている。日本橋には中心部分に現在の道路のセンターラインふうの突起があり、対面通行で人々の流れを円滑にしていた。図中でひしめき合う人々は、ごく小さく描かれるが、何人かは持ち物や運搬物から、武士階級と判別することができる。シルエットで描かれた「棒突人」は、日本橋北詰（室町1丁目付近）の混雑と出商人を管理した者で、肴商人たちに雇われていた。生魚を扱った日本橋魚市場と異なり、四日市の魚市場では、塩漬けの魚が売られ

た。本図にも整然と吊るされた干し魚が描かれている。また、冬期には干魚問屋の間に蜜柑を商う店が立ち、冬の名物となっていた。遠景には江戸城と富士山が描かれるが、江戸城はどこかなおざりである。当時幕府は武家に係わる情報を出版することを禁じていたから、不特定多数向けの出版物で江戸城を堂々と描くことを版元が自主規制したと考えられる。なお、本図を描いた鋤形蕙斎（北尾政美）は、江戸湾から江戸全図を鳥瞰した屏風で「武の象徴」である江戸城を描き、そのもとで賑わう大江戸の様子を描写している。（富澤）



- | | |
|--------------|----------|
| 1 棒突人 | 8 木戸 |
| 2 江戸大八車 (守貞) | 9 平田船 |
| 3 擬宝珠 | 10 鶴 |
| ④ 江戸城 | 11 火の見梯子 |
| 5 高札場 | 12 押送船 |
| 6 干し魚 | 13 蔵屋敷 |
| 7 柱看板 (守貞) | 14 土手蔵 |